

2020 年度 地域課題の発見及び解決のための人材育成手法の検討に係る研究会報告書

2021 年 3 月 31 日

公益財団法人都市活力研究所

## 1. はじめに

### (1) 研究会の名称及び目的

この会は、地域課題の発見及び解決のための人材育成手法の検討に係る研究会と称する。本研究会は、大阪・関西の持続的発展のため、地域活動やコミュニティビジネス、ソーシャルビジネスを振興し地域社会の公益に資する人材を育成する手法及びそれに関連する事項について調査・研究することを目的とする。

### (2) 活動内容

- a. 社会・地域課題の発見・解決に係る情報収集及び整理
- b. 社会・地域課題の発見・解決のためのフレームワークの構築の検討
- c. 試行的に行う人材育成講座に対するアドバイス
- d. その他本研究会の目的を達成するために必要な事項

### (3) 研究会名簿（順不同、敬称略）

<会員>

大阪大学 人間科学研究科 教授	三好 恵真子
大阪大学大学院工学研究科	
地球総合工学専攻 建築・都市計画領域 特任助教	辻 寛
大阪市都市整備局 企画部 まちなみ環境担当課長	若井 富美代
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 特任研究員	弘本 由香里
阪急阪神ホールディングス グループ開発室部長	石原 敏孝
NPO 法人 Co. to. hana 代表理事	西川 亮
公益財団法人都市活力研究所 専務理事	鈴木 裕二

<事務局>

NPO 法人 Co. to. hana コミュニティデザイナー	丸毛 幸太郎
公益財団法人都市活力研究所 主席研究員	三本松 道昭

### (4) 研究計画

複数年次継続して研究会を開催することとし、年間の開催頻度は3回程度とする。

(5) 本年度の活動状況

開催日時	内容
<p>【第4回】 7月8日(水) 19:00~21:00</p>	<p>講師：大阪大学 人間科学研究科 教授 三好 恵真子 様 演題：「“共進化 (Co-evolution)” する環境—可能性を伸ばす研究教育—」 講師：NPO 法人 Co. to. hana 代表理事 西川 亮 様 演題：「人材育成講座の計画について」</p>
<p>【第5回】 12月9日(水) 18:30~20:30</p>	<p>講師：京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治 様 演題：「「まちづくり人材」とはそもそもなんであったか？ ～まちづくり平成史から考える～」 講師：NPO 法人 Co. to. hana 代表理事 西川 亮 様 演題：「人材育成講座の状況について」</p>
<p>【第6回】 3月26日(金) 19:00~21:00</p>	<p>講師：学校法人 武庫川学院 武庫川女子大学 大学事務室統括部 中央キャンパス大学事務室(経営) 実践学習センター 時任 啓佑 様 演題：「もっと幸せに生きる人を増やす 学びと共創の場づくりから考える ソーシャルデザイン」 講師：NPO 法人 Co. to. hana 代表理事 西川 亮 様 演題：「人材育成講座の実施結果について」</p>

## 2. 研究会活動を通じて得られた情報・知見（講演録）

### 第4回研究会

#### （1）会員の取り組み紹介

大阪大学 人間科学研究科 教授 三好 恵真子 様より

##### ○タイトル

「“共進化（Co-evolution）”する環境—可能性を伸ばす研究教育—」

##### ○当方の研究室の他に類を見ないユニークな特徴

私どもの研究室は世界各地の環境問題を対象にそこに暮らす人々の視点から幸福な生活を営んでいくうえで望ましい環境の在り方を一緒に共に考えていく研究というものに取り組んでおります。私たちはおそらく世界でも他にないような非常に特徴的な研究室を築きあげています。といいますのは、さまざまな分野の研究者が文理を問わず結集するユニークな研究環境を構築しています。院生は内部進学者はもちろんのこと学内のいろんな学部からもきますし、他大学から多様な学生が集まってきます。経験値が非常に豊富な幅広い年代層の社会人や、留学生からも多く在席している所も特徴です。

この共進化というのは、コ・エボリューションということなのですが、共に進化するということの生物用語です。複数の生物種が相互に影響を与えながら環境への適応能力を高める方向に進化する、つまり単独進化に比べて一緒にいることで優れた行動を導くことができるというような意味合いを持っています。一般に文理融合研究とか学際研究の重要性というものが言われているのですが、やはり専門用語や考え方というのが全く違う場合が多いのです。実際環境問題というものが一つの学問分野の中だけでは解くことができないものなのです。

##### ○三好の専門の変遷と研究対象の広がり

こういう環境を私は初めから理想的に作ってきたわけではなくて、私自身がユニークな研究歴を歩んできて、そうしたらいつのまにかこんな環境になってしまいましたというのが正直な所です。私はもともと食品物性学を専門にする自然科学系の研究者でした。20年程前に文系の大学という全く異なる環境に身をおくようになりました。阪大の外国語学部で当時の時代的要請から環境問題、つまり言語を使いながら環境問題を考える学生を育てるという所に私は赴任することになりました。そこにいったら本当に専門用語が全然違いますし自分の計算式とか化学式とかで話ができる人というのはまずいない。それでもきちんと専門性があって学生にとっても有意義な指導を試行錯誤しながら、身近な環境問題の中から考えて行こうというゼミをしたりして、今は人間と自然の共生という人間がずっと永遠的に付き合っていかなければいけないと思われるテーマにいきつくようになりました。だから分子から生態系までいろんなものを扱っているような感じになります。ただ専門家だけを集めているわけではなくて本当に文理の知を融合する中でその先に何が見えるかというような研究プロジェクトをいろいろさせて頂いております。

### ○研究の方法論について（文系と理系に跨る壁）

なぜこの文系と理系の対話が難しいのかということですが、それは文理の壁にまたがる壁があるということです。私たちは実在論といいます、だいたい現実には何かがあるというものを対象にしているのです。その中で本質主義と構築主義というものがあります。本質主義というものは自然科学系のものがこちらの場合ですが誰がみても同じように見える本質があって私と認識活動とは独立して現実があるというものです。構築主義の方は、見る人によっていろいろな現実の表れ方があるということです。ですから自分自身とみている現実との相互作用の中で構築されるということになってきます。これは人類学とか社会学とか人文社会学の多くの考え方ではあります。

### ○フィールドワーク（解釈的アプローチ／他者理解）

例えば構築主義的な立場としてフィールドワークというものが具体的なものとしてあげましたけれども、海外のフィールドにでていって、そこで大事なインフォーマントといわれる人たちと信頼関係を作ってその中で自分がフィールドの場に埋め込まれている意味というものを解釈していくという作業なのです。そこではフィールドワーカーの力量によって違った結果が出てきます。しかしそこに非常に面白さも出てくる部分もあると思うのです。文化的な変容とかプロセスとかそういうのもとらえられるので、一時点の時間的なものというよりもどのように社会の構造が変容してきたかというものもかえりみたりすることができます。そこで他者を理解するという中で物事がわかってきたり、或いは大きな集合的な記憶といわれる歴史が構築されている中で声にならない人たちの声を拾うことによってそこにどんな意味付けがあるかということの研究したりということもあるのです。ですからそういう意味では他者理解というのも非常に大事になってくるのではないかというふうに思います。

### ○リスク社会への突入（現代における大きな転換点）

私たちの環境問題というのが非常に複雑であるということの一つの証として今第二の近代に入っているということが言われております。社会学者の有名なウルリッヒ・ベックという方の言葉を借りれば第一の近代というのは富を分配する社会でした。第二の近代になりますとリスクを分配する社会になるのです。グローバルの拡大化に伴って国民国家が脆弱化して個人化というものが進行して家族崩壊していくということになってきます。これはいわゆる西洋近代が理想として掲げていた民主主義に基づく市民社会の実現を阻害するものにもなりかねないことになっています。

### ○大きな転換点に立つ現代社会とその内実

このような転換期にたつ社会の課題とはなんでしょうか。この近代社会が前提としていた家族、地域社会、学校教育、社会化の機能や小集団や中間集団などの社会としてのまともな一方における個人化現象と他方におけるグローバリゼーションへの社会変動をうけて非常に弱体化しているという事です。二つ目として21世紀の情報化社会のイメージは時間と空間を伸縮しながら個人と個人が情報のメディアを通じてネットワークを結んでいく

一方で先程申しましたような第二の近代の個人化とグローバリゼーションが近代国家や国民国家、社会の意識を確実に変えてきているということです。そして個人の生き方そのものに社会的属性であると同時に個人的属性でもあるジェンダーやセクシャルティーやエスニシティ、階級制といったものがむき出しに表れているのです。ですから差別や迫害を受けてきた経験というものは語られ聞き取られること、こういう事でアイデンティティの確保や自らの存在証明になるという事です。

### ○リスクの不確実性の重層化

この不確実性の重層化というのはコロナウィルスのような不可知のリスクや環境問題もそうなのですが、こういうふうな対策を講じていきましょうというような流れが組みにくくなっています。ですから企業活動や科学的研究、司法、メディアといったいまま非政治領域と考えられたものが政治的な意味合いを持って政治と非政治の概念の境界が曖昧になる一方で科学がリスク認知を独占することはもはや許されない状況ということ、原発事故の場合もそうですが、その知識の分配はコンフリクトの一つの争点になるのです。

一つは科学的な知見においても不確実性がでてきてしまいますので施策を講じていくということが難しくなってしまいます。そうすると政策ベースというのは主観的な部分がもとも大きいものですからここにおまかせという形になってくるとどんどん不確実性も大きくなって行って二重に難しくなってしまうということになるのです。ただ個人というものに対して目を向けないままになっていくとやはり非常に問題は大きくなってしまいうことで私たちの研究はその人々の暮らしの安全保障というところにも目を向けるような形でやっています。

### ○当方の研究室の特徴：“共進化 (Co-evolution)” する環境

そこでこの共進化するというところでこういう非常に複雑なリスク社会を扱いながら方法論として先程のフィールドワークで他者理解というものがでてきたと思うのですが、私たちの研究室は一応実践志向型地域研究という形で、当事者の視点から地域の人々に寄り添う形でよりよい解決を目指していくという形の地域研究を構築しています。その為には文理融合型の複眼的思考を持ち過去から現在未来までを見据えられるような人材を育成するという目標を掲げているのです。

### ○地域研究をベースに学際研究をどう体系化していくか？

ただ地域研究をベースにして学際研究を体系化するという事はそんなに簡単な事ではないのです。私たちがこの学際研究を作っていくということはそれぞれの学問を理解するという中でそこにおけるその学問の限界性を認識してそれをどうやってあわせもっていくのかということを考えています。私たちの研究室でやろうとしている事はここに対話理解、そして共に進化し体系化していくところに力を入れているということになっていくと思います。

### ○当方の研究室より輩出した個性豊かな研究者の紹介

まだこの研究室を立ち上げて10年程ですが、これまで輩出してきた研究者が非常にユニークなので紹介したいと思います。一人目は姉崎正治さんという方で何年か前に阪大で73歳で学位をとったということが新聞で報道されました。特例で78歳で特任教授をされています。住友金属の企業研究者で40歳の時に東京大学で博士号をとられました。定年退職後に大阪外国語大学、スペイン語科に入学されて、そこでスペイン語を学ばれて16世紀ぐらいの歴史の書物が読めるようになったのです。そうすると化学式がない時代のその人々が使っていてすごく光る技術があってそれを科学的に読み込んで解明した。そして今のレアメタルのリサイクルに役立つような技術開発につなげたということで、先人の知恵を未来に活かす研究をされています。

<以下略>

### ○学部教育を“ダイヤモンドが輝くまで”にたとえれば…

学部教育をダイヤモンドが輝くまでに例えればということでお話させていただきたいと思います。ダイヤモンドの原石をみつけて光るまでということを考えますと、まずテーマを見つけるのに一番大事なのはこの子たちの熱意なのです。それが学問になるかどうかはあまり考えていなくて何があなたは得意なんですか好きなんですか、何がやりたいんですか？それで、そこを環境学をベースにその感性を磨いたりコミュニケーション能力を高めたり複眼的思考を高めるような基礎研究をすると、原石が大きくなる。後は専門的にこう磨いていくということになっています。そうすると輝くということです。

### ○食の分野で社会で活躍する卒業生の紹介

食の分野で活躍している学部生として紹介したい方がいます。菊池さんは大阪外国語大学のときに教えた学生なのですが、フードピクトと呼ばれるユニバーサルデザインを作っているのです。2018年には保健文化賞というものを受賞しております。彼の目線の素晴らしい所はマイノリティーで困った人達の視点から安心な信頼社会を作ろうとした所が大きいのではないのかというふうに思っています。

### ○課外活動、近隣地域への社会貢献

私は環境サークル GECS という所の顧問を17年やっています。学生は年代ごとに変わっていくのですがこのコミュニティを維持しながらそれぞれがすごくやる気をもってやっています。それはやはり地域の方々が支えてくれているからだと思うのです。大学生の能力というものを地域の方々が非常に大切に育ててくれています。大学というものは閉じたコミュニティではなくて地域に開かれたものとして地域から沢山のものを教えて頂ける場なのかなということを改めて GECS を見ながら感じっております。

一方能勢町と包括協定で、能勢の食育の施策を作るということで関わらせていただいたのです。そこで総合大学の強みを使って学生の有志を集めて能勢町プロジェクトとか学部生が施策に関わるという事をやらせて頂きました。

○ (まとめ) 学際的アプローチを基盤に産官学連携へ

最後にまとめですが学際的アプローチといわれるものはさまざまな形があって例えば人間科学も教育学とか社会学とか心理学とかそれぞれの学問を統合して学際性といっているようなマルチディシプリナリーリサーチという方法がほとんどだと思うのですが、それを環境問題とかいわゆるグローバルイシューのもとにさまざまな知を統合していくということで学際研究というのが今発展している状況にあると思います。その中でこれから目指す産官学連携というものはトランスディシプリナリー、学問を超えていくということなのです。いろいろな複雑な課題がある中でそれを大学だけの専門性ではなくて行政の方や企業の方や NPO の方と市民の方も含めて共同でやっていく。その中の超学的な学問というものがこれからわれわれはますます必要になってくるのではないかというふうに思ってそういうものに貢献できるような学生人材を育てられたなというふうに思っています。



## 第5回研究会

### (1) 話題提供

京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治 様

#### ○タイトル

「まちづくり人材」とはそもそもなんであったか？～まちづくり平成史から考える～

#### ○自己紹介

京都市は14の区と支所があるが、それぞれに担当のまちづくりアドバイザーが1名雇用されており、区役所が行う市民参加や、市民協働のプロジェクトについて助言したり、パートナーとつなぐ仕事をしている。助言だけではなく、現場でプロジェクトと一緒に動かすことを期待されている。兼業可能なので、時々大学で教えたり、市民向けのまちづくり講座で話をしたりしている。

#### ○まちづくりの定義

私はまちづくりを「まちの人なら誰でも使える財やサービスづくり」と定義している。この、まちの人なら誰でも使える財やサービスというのは、経済学では公共財という概念で呼ばれている。ハード面では橋、道路、街路樹、集会施設などをつくること。ソフト面では、たとえば道路の清掃活動とか、高齢者の福祉活動とか、子どもたちが集まるコミュニティサロンをつくる活動だ。

公共財は、非排除性という性質を備えるといわれている。つまり特定の利用者を排除できないということである。そういう性質があるがゆえに、フリーライダーと呼ばれる人たちが現れてしまうので、ビジネスとして非常に成り立ちにくい性質がある。

#### ○まちづくり人材と平成史

まちづくり人材の分類は「公共事業を担う公務員」「行政から業務を請け負う民間業者」「主にインフラを商う事業者」「いわゆる無償労働者と呼ばれる者」であったが、阪神大震災を契機として第5のプレーヤー「流動層のボランティア」が現れた。それによって阪神大震災のことを市民活動史的にはボランティア元年と呼ばれ、1998年に特定非営利活動促進法ができた。ここで議論するまちづくり人材の想定はこのボランティア層と考えている。それ以降の平成というのはボランティアの時代であり、「指定管理者制度」「パブリックコメント」「地域おこし協力隊」などボランティアという人たちが動きやすくなるような制度が整っていった。そして2011年の東日本大震災でピークに達した(studio-L山崎亮氏「コミュニティデザイン」)。一方、人口動態的な説明では、90年代から00年代において市民参加の波と団塊世代がちょうど円熟期に入る波が重なっていた。

2010年代はボランティアを増やそうとしてカンフル剤を打ち続けてきたという印象がある。「サードプレイスブーム」「大学COC事業(センター・オブ・コミュニティ)」「まち・ひと・しごと創生法」「社会福祉法改正(公益的な取り組みを義務化)」「リノベーションブーム」「関係人口ブーム」などで、2010年代は頭打ちになった人材をもっと増やそうといい続けた。一方団塊ジュニアに期待することは経済的な余裕がなく難しいということで、お

そらくボランティアというものが2010年代に終わっていかうとしている。

そこへ新型コロナウイルスが流行して時計の針を5年早めました。その結果、ボランティアではできないという一方で、まちづくりや地域活動のプロ化、クライアントワーク化が起こっている。

### ○まちづくり人材をどう発掘していくのか

まちづくりはプロ化、クライアントワーク化しているという前提を踏まえるならば、人材の発掘にまず必要なのは、仕事として発注してあげることだ。これは金でないと動かない人たちがばかりになってしまうということではなく、プロの市場ができたということだと思ふ。コロナの流行がよりいっそうプロフェッショナルリズムに拍車をかけたと思っている。

コロナによって加速したもう1つの現象がオンラインサロン化だと思っている。例えばキングコング西野氏や地域資本主義の柳沢氏などがオンラインサロンの仲間を増やしている。これによって人材がよりおもしろい人のところに吸われていって、住んでいるけれどもまちづくりはやらないということは、今までよりも加速すると思っている。だからまちづくり人材を確保したい人たちは、オンラインサロン競争に参入せざるをえないと思ふ。オンラインサロンに人を集めるにはカリスマが必要だ。カリスマというのはこの世界は今こうなっているから、我々はこうしないといけないのだという世界観とミッションを語ってくれる人である。

もう1つ、これも進むだろうと思ふのは、今まで企業が独占していた人材の解放だ。そして、パラレルワーク化が進むと思ふ（神戸市の副業人材制度、電通社員の個人事業主化など）。これによりいわゆる意識の高い人材ほど、いち早くオンラインサロンに登録していく、もしくはそれを立ち上げるようになる。

このように従来型のいわゆるインプット型の講座では、そういう人たちは集まらないので、カリスマの世界観を軸に集まる交流の場というものが、おそらくこれから必要になっていくだろうと思ふ。

### ○産学官民と立場の違う人が集まる場が、いかにあるべきか

まちづくり人材をオルグしていくには、たぶん、待ち受けるプル型勧誘ではなく、こちらから出張って参加していくプッシュ型勧誘が必要だと思っている。例えばまちづくりの観点では2010年からのコミュニティサロンブームで集客競争が起こり集まらないところは淘汰された。また子ども食堂は本当の弱者が参加できないという問題がある。福祉の観点ではスコットランドでリンクワーカーという専門職を置いたり、ドイツにストリートワーカーと呼ばれる職能がでてきている。

つまり、オンラインサロンに人を集めるためには、人がつくったオンラインサロンに行って、そこに参加しているまちづくりに興味がありそうな人を連れ帰ってくるという作戦もあるだろう。

一方、人材の発掘支援そのものが限界を迎えている。これは支援者ばかりが増えて実際に活動する人が増えないという奇妙な現象が起きているような気がしている。だから人に

やってくれというよりも、自ら人材となって何かしていったほうがいいのではなかろうか。もしみなさんが人材を発掘する側ではなく、発掘される側の人材になるとしたら、何がしたいですか。

### ○コロナはまちづくりにいったい何をもたらしたのか

よく新型コロナウイルスが革命的な変化をもたらしたと言われるが、それは言いすぎだろう。リモート化、オンライン化とか、衛生対策というのが新しいというけれども、それもずっと昔から必要だと言われていた話で、むしろなかなか進まなかったものが加速度的に進んだというだけだ。私はコロナが時計の針を10年進めたというふうに説明している。つまり地域活動が立ち行かなくなる時期が早まるということで、このどさくさに紛れて、回覧板や地蔵盆など、もともとやめたいと思っていたことをやめようという動きが出ている。まだ定量的なデータが出ていないから何とも言えないが、おそらくこの1年、2年でやめた地域活動者は多いと思う。

まちづくりは長年、集会というものに依存してきたが、コロナが流行った結果、集会というものを禁欲しなくてはならなくなった。それで私は非集の時代という言い方をしている。この非集が発生した結果、従来のまちづくり活動が頼ってきた方法がほとんど通用しなくなった、という意味では革命的だったかもしれない。ただし、非集というのは緊急事態だと思うので、いずれは過ぎ去ってしまうと思う。今は混乱期で誰も正解がわからないし、今までのやり方が通用しない。つまり新しい概念の提案がどさくさに紛れて通っていく時期だ。例えばビデオ通話で勉強会をするというのもその1つだ。むしろ私がみなさんをお願いしたいのは、通したい自分の願望「私だったら何に熱中できるかな」「どんな未来を実現したいかな」といったものを通していただいたほうがいいのではないかということだ。

### ○まとめ

①まちづくり人材をどう発掘していくのか。ボランティアというものが終わるから、基本は仕事を発注してあげる。そのうえで、人材とのネットワークをつくるには、オンラインコミュニティが有効で、そのオンラインコミュニティに人を集めるためには、世界観を示すカリスマを用意する必要がある。

②この場がどうかたちで人材発掘に貢献すればいいか。カリスマを立ててオンラインサロンをつくる。コトハナがやっている講座もそうだし、あるいは人がやっているオンラインサロンに出張って行って、まちづくりに関心のある人を勧誘して連れ帰ってくるというプッシュ型営業マンの集会の場としての役割がある。

③コロナはまちづくりに何をもたらしたのか。集会に依存していたまちづくりに対して、非集という緊急事態を突きつけた。基本的な戦略が通用しなくなった。それは、ネガティブにいうと非常にしんどいが、ポジティブにいうと、どさくさで物事が通る時期なので、ぜひみなさんには社会がどうなるかというよりも、「私ならこういう社会を実現したいな」というのをやってみるとよい。

## 第6回研究会

### (1) 話題提供

学校法人 武庫川学院 武庫川女子大学 大学事務室統括部

中央キャンパス大学事務室（経営） 実践学習センター

時任 啓佑 様

#### ○タイトル

「もっと幸せに生きる人を増やす～学びと共創の場づくりから考えるソーシャルデザイン」

#### ○自己紹介

私は、4年ほど教育の業界で、外から大学教育に関わるというような現場にいた。次に OBP アカデミアというコワーキングスペースを運営するベンチャー企業に、立ち上げから4年半ほど在籍していた。去年の春から武庫川女子大学の経営学部の立ち上げから一緒に入らせてもらっている。副業としては、神戸のベンチャーでオンラインのコミュニティづくりを手伝っていたり、川西市の産業ビジョンにおいてコワーキングスペースをつくる観点から会議に参加していたりする。

#### ○テーマについて

ソーシャルデザインという言葉をよく耳にはするものの、改めて聞かれると明確に答えられなかったが、丸毛氏に紹介いただいた本に「人間の持つ想像の力で、社会が抱える複雑な課題の解決に挑む活動である」というふうに書いてあった。私の中でどういう社会の課題に対して活動しているかという、大きな話になってしまうが、幸せに生きている人が日本には結構少ないのではないかという思いがある。もう少し言うと、楽しく働いている大人が少ない気がする。その背中を見て育っていく子どもも当然、社会に出ていくことに前向きにあまりなれないと思う。そこへのアプローチとして「学び」、「共創」、「場」というものを使って、ここ数年やってきていると思ったので、今回のタイトルにさせていただいた。

#### ○OBP アカデミア～コワーキングスペースの捉え方

コワーキングスペースというのは、「共に、働く」ということである。そこでつながったコミュニケーションを取ったり、何かことが起こっていく場所というふうに捉えている。私の師匠が言うには、「コワーキングスペースはローカルを盛り上げるような装置にもなれば、いろんな人のやりたいことを実現するような場にもなる。」ということで、そのように私も捉えている。

#### ○OBP アカデミア～立ち上げ期

OBP は5万人ほどワーカーがいるが、住民はいないまちである。まちができて30年経って再活性したいという思惑の中で、コワーキングをつくるというような話がでてきた。運営会社は、テナントとしては完全に自主運営であった。「拠点をつくって、まちを盛り上げる」という方針をどう具体化するかは、走りながら考えていくということであった。今で

こそワーキングの認知度は上がっているが、当時は「なぜ場所を使うことに会費がかかるのか」という見方で、会費も安く、ドリンクも飲み放題で、大阪城が見下ろせるような眺望もあるし、本も300冊ぐらい置いてあるのに、全然刺さらなかった。

### ○OBP アカデミア～まちに出よう

それでなんとかしようかということで、とりあえず私はまちに出てみた。OBPの中を少し動いてみたが、オフィスワーカーばかりで、街のことはそんなに好きでもないようだ。あえて京橋の方に行くと、街をにぎやかにして活性化しようというような社団法人があつて。そこにいらせてもらった。ワーキングスペースを日本で初めて作った、カフーツの伊藤さんに相談すると、「イベントをやれ」、「来るきっかけを作らないと、ワーキングなんてピンと来る人がいないからどうしようもないよ。その人を今度、先生にして、1つ、2つ話しをしてもらおう。また次に来た人をその会に巻き込んでいって、何か一緒に場をつくっていくようなことをやっていったらいいよ」と言われた。それで外部のイベントに出向いて積極的に勧誘した。その際、「場所代は要りません。こちら講師料は払いません。一緒にイベントをやって一緒に発信をして、一緒に売上をシェアしませんか」という方向に持っていったら、「こんないい場所を使って、出来高でお金も分けられるんですか」ということで徐々に、この場所で何かしたいというような人が増えていった。そことどれだけ関係があるかわからないが、会員数も徐々に徐々に増えていき、多様な人がこの場所に来てくださるようになっていった。

### ○OBP アカデミア～みんなで働く

そのうちに、OBP協議会から「毎年、街で文化祭をしているが、もうちょっと面白いことがしたい。何かアイデアはないですか」と言われたので、京橋側とつながっているのに一緒にバルのイベントをやる企画を提案して実施したところ好評であった。そこで「チラシやウェブサイトが作れるので、発注してください」ということをしながら、活動を広げていった。その後入居しているビルオーナーから「公式サイトのリニューアル」「にぎわいづくり」

テレビ局から「新規事業を企画してほしい」などの依頼が来るようになり、会員とともに企画して一括で受注して運営会社がディレクションするという付加価値をつける方法を編み出した。さらに自分たちとまちの主体の方たちとの関係を作りながら情報発信もするというようなことが、だんだんできていくようになった。ONtheという梅田のワーキングスペースを作る話を大阪地下街からいただいたときも、我々の会社で受けさせていただいて、建築設計、オープニングイベントの企画、ロゴ、サイトを会員でつくり、インテリアデザインをスタッフでつくった。全てを元々ある場の関係性でもって、場から場を生み出すというプロジェクトになった。

### ○私のためのまちづくり

まちづくりというのが最初よくわからなかったが、人が自分のやりたいことをしたり、能動的になっている状態を作り出していくということではないか。まちと言っても結局人

だし、影響を受けて人が変わっていく。そういうような何か自分からやろうというプレイヤーが増えていくということで、そういう好循環が生まれて場所が面白くなっていく。それが積み上がっていくということが街を魅力的にしていくのではないかと考えている。

#### ○武庫川女子大学経営学部～コンセプト

武庫川女子大学の経営学部は 2020 年に新設された。コロナや、AI、働き方の変化など、外的な変化に柔軟に対応する人、また女性はライフステージが多様なので、そういった自分の変化と向き合いながら、柔軟に自分が生きたいように生きられる人をつくるというコンセプトを掲げており、そこに惹かれた。

#### ○武庫川女子大学経営学部～私のミッション

私の大きなミッションが 2 つあって、1 つはコワーキングスペースのようなものを学校の中に作ること、もう 1 つが学外を中心とした学びのプログラムを企画して実践的に学ぶ活動をするということだ。

#### ○武庫川女子大学～コロナ禍を受けて

アンケートを取って学生の声を拾うと、出会いがないとか、友だちができないというような状況があるのがわかってきたので、いろんな面白い活動をしている大人の話聞くようなイベントを始めた。そこで一緒に運営してくれるスタッフを募集した。会えないので、Slack を導入したり Zoom を使ったりして定期的に会議をしていく。最初はとりあえず「どんなことを学んでみたい？」と聞きながら、私が企画して、それをサポートしてもらうようにした。考え方としては、学生の視野をいかに広げていくか。またちょっとやれるかもみたいな感覚をいかにつかませるか。こういうようなことを考えながら、学生のニーズを取りながら、場を回していった。あとは、「みんなのもっとやりたいことをやっていこうよ」というようなことで、オンラインでアイデア出しもして、いろいろプロジェクトが立ち上がってきて、リーダーができて、それぞれのチームを私がフォローするというような状況になっていった。

#### ○武庫川女子大学～私の学び

このような活動の中で学んだことは、1 つ目はオンラインであっても関係性は育めるのだということだ。ポイントとしては、いかに Slack 上、Zoom 上で自分を出せるようにするか、そこで心理的安全性を確保していくかということである。2 つ目は、自主的な活動なので、彼女たちのやりたいことをしてもらわないといけない。そこをどうやって見つけてきてサポートしてあげるかが大事だ。コロナになって改めて思ったことは、「場所じゃない。ハードじゃない」、「やっぱり人だ。コミュニティだ」というのに気付いた。

#### ○武庫川女子大学～実践学習の意義

実践学習は経営学部の必修科目である。インターンシップやサービスマーケティング（ボランティア）、フィールドワークというところでいろんなプログラムを用意している。3 年生になると急に、「就活してください。会社を選んでください」となるが、一体世の中にどんな会社があるのかとか、どんな働き方がある、生き方があるのかというのを知らないのに、

いきなり選べと言われても困るだろう。この実践学習は、実際に現場に出ている人々と協働するので、そこでいろんなことが知れる。「地元こんな面白い会社があるのか」、「フリーランスという生き方があるんだ。会社に就職するだけが全てではないんだ」というようなことを早期に気づいた学生が、また学校でそれに紐づく学びも得ることができるので、これを在学中に高速回転することによって、自分のやりたいことを見つけたり、それに紐づく学びを元にした成長ができるという考え方をしている。私は40種類ほどプログラムを作った。

### ○武庫川女子大学～実践学習を通じて

実践学習を通じて、「このまま、私、インターンを続けます」「このボランティア、続けます」という声が出てきたというのは、非常に大きなことだと思っている。場合によっては、「そのまま就職します」と言う人も出てくるかもしれないし、「地域活動に入っていきます」ということもあるのではないかな。そのように、このプログラムを通して学生がやりたいことを見つけたり、次のアクションにつながるというのは理想的だというふうに思っている。

### ○社会教育士

社会教育士という資格があることを知った。私の仕事はこれだと気づいた。本当にいろんな所属の皆さんをつなぎ合わせながら、そこで人をつくったりつながりを作ったりして、結果的に地域を盛り上げていくようなことにつながる。そういうようなことをさせてもらっていると思っている。

### ○まとめ

神戸大で、どういう人が幸せになるのかという調査の記事があったので、少し引用するとお金を持っているとか、学歴がどうこうということより、結局、自己決定、自分で自分の人生を選んで生きているかどうか。それが自分が幸せに生きているという手触り感につながってくるという話があるが、自分自身でもそうだと思う。こういうところを意識したときに、今、大学でやっていることを通じて、人が場とか実践のプロジェクトというのを通じて交じり合っていく。そのプロセスで学び合いみたいなことが起こって、そこの中から自分のやりたいこと、夢を見つけるような人が出てくる。やらされではなくて、自分のしたいことを歩んでいく、そういう人が増えればいいなと思う。今、大学生にアプローチしているので、すごく大きな視点で言えば、そうやって社会に楽しく働く人が増える。自分のやりたいことをする人が増える。そういう大人が増えていけば、その背中を見て育つ子どももきっと、「早く大人になりたいな」とか、そういうような人が生まれてくるのではないかと考えている。